

中國出土資料學會
平成21年度第2回例会

日時：平成21年12月12日(土)
受付開始 12:30～
研究報告 13:00～17:00

場所：大正大学1号館2階大会議室(正門を入り右側の建物)(東京都豊島区西巣鴨3-20-1)
会場へのアクセス：JR 巣鴨駅から都営地下鉄三田線に乗り換え、
西高島平行「西巣鴨駅」下車徒歩2分

報告 報告者：海老根 量介(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)
発表題目：戦国『日書』に反映された地域性と階層性—九店楚簡『日書』・放馬灘秦簡『日書』
の比較を通して—

発表概要：近年中国各地で出土している『日書』は「中下層の人々を対象とする」と言われているが、実際には諸侯王・列侯の墓より出土した例もあり、明確な根拠が提示されているとは言い難い。楚と秦で『日書』の内容に違いがあるという指摘があるが、具体的に見てみると、内容ばかりでなくそもそも対象者として想定される層が異なっていたことが分かる。本発表では、九店楚簡『日書』と放馬灘秦簡『日書』の相違に焦点をあてて考察したい。

報告 報告者：宮本 徹(放送大学准教授)
発表題目：上海博楚簡『用日』用韻考
発表概要：

報告 報告者：曹 峰(清華大学哲学系教授)
発表題目：上博楚簡『凡物流形』の文章構成と思想特徴
発表概要：上博楚簡『凡物流形』に九つの「聞之曰」が見え、その中に古人或いは経典の言葉が含まれていると考えられる。『凡物流形』は「聞之曰」という表現方法を利用し、「道」、「一」、「心」に対する論述によって、万物が存在する根本的原理への解答を図り、政治行動を指導しようとしている。『凡物流形』は上下両篇に分けることができ、前の三章は上編で、質問を中心とし、後の六章は下編で、解答を中心とし、上下両篇は思想上においては齟齬が見えなく、互いに対応している。『凡物流形』の内容は、緊密な関連性をもつ文章ではなく、ある目的によって相関的な資料が集められたものと言える。この内容は恐らく独創的なものではなく、その知識的背景や言語的特徴から見れば、『管子』四篇、特に内業篇と最も密接な関係をもつであろう。

参加費(資料代)500円
非会員の来聴を歓迎します